

課題に対する自分の立場をリアルタイムに変容しながら行う討論

大阪教育大学附属池田小学校 教諭 佐野 陽平

キーワード：小学校，討論，4年生，社会科，タブレット端末，リアルタイム

実践の概要

小学校では、児童が討論をする際、はじめとおわりに「賛成・反対」「〇派・△派」といった自分の立場を明確にする授業がよく実践されている。ICT機器の活用を通して、この立場の変容を討論前後だけでなく、児童がリアルタイムに立場を変容しながら討論できるようにした。

1. 目的・目標

(1) 他者の意見との比較から自分の意見を吟味

本実践は、児童が他者の意見との比較から自分の立場や意見を何度も吟味することで、思考を深めていくことをねらいとする。

(2) 討論の活性化

児童が自分の意見を発表する上での効果もあると考える。なぜなら、自分の意見によって、仲間の立場に変容があれば、「共感してもらえた。」などと感ずることができる。自分の発言に価値があったことを視覚的に理解できるのである。

(3) ふりかえり・評価での活用

ふりかえりの手立てとして活用する。指導者は、授業の中で児童の立場の変容を記録しておき、ふり返りの際に提示する。児童はその時々で、自分がいかに悩み考えて、自分なりの結論に至ったかを知ることができる。つまり、自分の思考の過程を視覚的に捉えられる板書やノート以外の第3の手立てとなる。

2. 実践内容

2.1 本単元と本時の概要

本実践は、4年生社会科の単元「地域の発展に尽くした人々」での実践である。本校は、大阪府池田市にあり、北摂地域の発展に関わった阪急電鉄の創始者である小林一三を取りあげた。本時では、「あなたが小林一三の立場

なら、『梅田』『池田』『箕面』の内、動物園をどこに開きますか。」という学習課題を設定し、児童が調べたり、意見交流したりして自分なりの考えをもつ授業を展開した。

2.2 本時の実際のような

(1) 導入

これまでの学習を想起した上で「あなたが小林一三の立場なら、梅田、池田、箕面の内、動物園をどこに開きますか。」と学習課題を設定した。そして、現段階でのそれぞれの立場



写真1：指導者と相談しながら立場を決める児童

場を児童がiPadに示す。児童は、この段階では深く考察していないので、3つの地域のイメージから立場を選んでいた。児童のiPadには、自分の名前しか表示されない

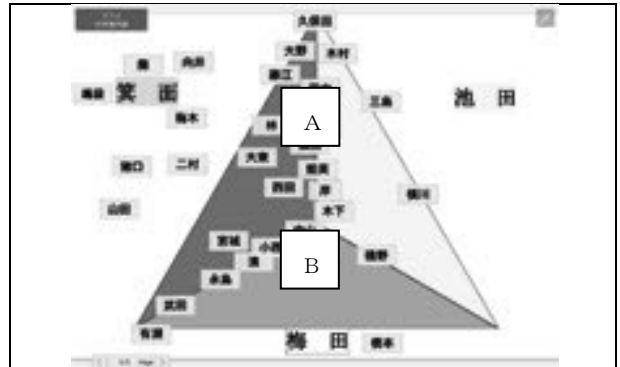


写真2：導入時に電子黒板に映した全員の立場

【本時の指導略案】

●単元指導計画（全体時間8時間 本時3時間目）

- (1) 北摂地域の昔と現在の様子の違いから、小林一三とその事業に関心をもつ。(1時間)
- (2) 「住宅販売」について阪急電車経営側と消費者の立場から利害について考える。(1時間)
- (3) 「動物園事業」がどこで行われたかを経営側の立場から仮説をたてる。(1時間)
- (4) 小林一三記念館を見学し、小林一三の事績について調べる。(2時間)
- (5) 小林一三の事績が、北摂地域の発展に与えた影響を考える。(1時間)
- (6) 小林一三北摂地域貢献度新聞を作成、推敲した後に相互評価する。(2時間)

●本時の目標 平成29年3月 児童数33名

目標：当時の社会的事象をもとに、「動物園事業」が取り組まれた場所について根拠のある仮説をたてることができる。

●評価／自分がたてた仮説を、学習内容を踏まえて具体的に書くことができる。(思考・判断・表現)

学習活動	指導上の留意点
前時までの学習から、当時の「梅田」「池田」「箕面」の特徴を想起する。	当時の画像や文書資料を提示することで、児童がそれぞれの地域の特徴を想起しやすくする。
動物園事業を3つの地域のどこで展開するべきかを考える。	iPadと電子黒板を活用し、全員の立場を視覚的に捉えられるようにする。
「動物園事業をどこで展開すべきか。」について、自分の考えに根拠をもって話し合う。(ペア→グループ→全体)	iPadと電子黒板を活用し、自分の立場をいつでも変容できるようにすることで、交流の中で、自分と友達のを何度も比較するように促す。
話し合いを踏まえて、動物園事業をどこで展開すべきか。」について、根拠をもって自分なりの仮説をたてる。	書き出しのみ提示し、自分なりの言葉で学習を振り返る。課題の答えを伝えないことで、小林一三記念館見学への意欲が高まるようにする。

が、指導者の iPad には、ネットワークで全員の立場が表示されるように設定した。電子黒板には、指導者用 iPad の画面を映すことで、全員の立場が視覚的に捉えられるようにする。なお、「悩んでいる」という立場も認めた(写真1)。例えば、写真2のAは、「箕面と池田のどちらかで悩んでいる」ということになり、Bは「3つで悩んでいる」という具合になるのである。ペアトークを行うと、「どうして箕面にしたの?」「どうして悩んでいるの?」といった根拠をたずねる発言が多く見られた。

(2) 展開

- ① 経営者目線で、「梅田」「池田」「箕面」の地域の特色を踏まえ、それぞれの地域に動物園ができた場合のメリット・デメリットを考える。この自力学習の時間を保障し「このようなメリットが考えられるから、梅田にする。」「このようなデメリットが考えられるから、梅田にはしない。」という意見を全員がもてるようにした。
- ② 自分の仮説を根拠に、グループで話し合う(写真3)。
- ③ 自分の仮説とグループ学習で取り入れた考えを根拠に、自分の考えを全体で話し合う。



写真3：グループで話し合う様子

②と③の活動の間、「それは、いい考えだ。えー、悩む。」「その考えなら、お客さんがこなくなるよ。自分のなら〜。」などのつぶやきや発言が多く見られ、友達の仮説を聞いて自分の仮説と比較しながら、多角的に考えていた。

さらに、①～③の学習活動の間、いつでも自分の立場を変更できるようにした。多い児童で立場を4度ほど変更する児童がいた。もちろん、一貫して立場を変更しない児童もいた。重要なことは、立場を変更するのではなく、自分の立場に根拠があるかどうかである。お互いの立場とその変容がわかるので、討論は白熱した。自分の発言によって同じ立場の児童が増えると、「よし!」とつぶやいたり、児童から「自分と違う立場の□□さんの意見を聞いてみたい。」といった発言があったりした。また、指導者としては、「今、どうして立場を変えたの?」「ずっと立場を変えない理由は?」などの本実践ならではの発問も取り入れた。児童は、具体的な根拠のある発言を繰り返していた。

(3) まとめ

自分の立場の変容を確認した上で、学習課題に関するこの時間における最終の意思決定を行う(写真4)。児

童は悩みながらも、最終の判断を下していた。指導者が小林一三記念館へ見学に行くことを伝えると、「小林一三は、実際に、どこに動物園を開いたのですか?」と児童が聞いてきたので、「見学のときに調べて下さい。」と返して本時を終えた。

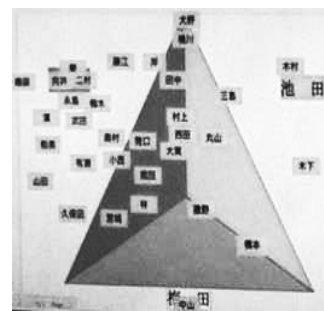


写真4：意思決定時に電子黒板に映した全員の立場

3. 成果

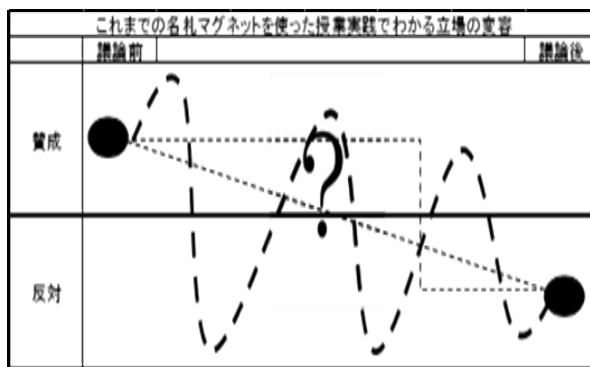


図1：児童の思考の過程の例

図1のように、授業中に児童は何度も考え直しているはずである。従来の授業ではこの点を視覚的に捉えられなかった。しかし、本実践ではその様子が捉えられ、記録として残すことができた。また、展開の中での友達の立場が変容したことによって出てきたと考えられる発言は、多角的に事象を捉えようとしていることを表し、活発な討論を促したと言える。児童のふりかえりには、「途中で、△△に(立場を)動かしたりして悩んでいたけど〜」のような記述があり、立場の変容を確認することが一つの手立てとなったと言える。授業後、指導者が評価をするための手立てとしても有効であった。本時のワークシートと指導者用 iPad のスクリーンショットを照らし合わせていくと、「どの児童の発言が大きな影響を与えたのか。」「最初と結論は変わっていないが、スクリーンショットから、立場が揺らいだ上での結論である。」などの視点を踏まえて評価を考えることができたからである。

4. 今後に向けて

課題として、リアルタイムに立場を変更するためには、ネットワーク環境が整わなければ難しい。本実践の中でも、一斉に多くの児童が立場を変更すると、操作とiPadの反応に数秒間のタイムラグが発生してしまい、児童が戸惑う場面があった。学校の現場職員だけでなく、機器の専門家と連携しながら環境を整え、実践を積み重ねていく必要がある。ほかの可能性として、個人持ちでiPadを本当の意味で「いつでも」扱えるようにすると、家庭からでも操作ができるようになるのではないだろうか。